

7月21日に、「現代中国情勢研究会 第1回」を開催した。下記はそのとき話した私の設立趣旨である。

## 1. 現代中国情勢の真相に迫り、今後の動向を読む

私は一介の中小企業の工場経営者として、日本や中国・韓国・ミャンマー・バングラデシュなど多くの国で、経営に携わってきた。ことに中国ではこの20数年間で、全土に渡って10個所以上の縫製工場を立ち上げ、60店舗以上の直販店を展開してきた。3年前、私は経営者を引退し、それまでの経験をもとにして、現場情報を重視したチャイナ・ウォッチャーに転身し生きる道に進んだ。そして最近では中国の経済情勢などについて、私なりにその動向が読めるようになってきた。私は毎週2回の目標で、その「当て推量」を文章化し読者各位に発信することを、人生最後の仕事としてきた。

最近、巷では、中国を経済大国とする認識する風潮が支配的であり、日本の多くの企業がすべてその方向になびいている。この流れに対して私は、「中国経済は砂上の楼閣である」と、その危険性を、声を大にして叫んでいるが、大勢には逆らえず、今や誰からも無視されるような状況になってきた。そのような中で私は、私の言説にはマクロ的な視点が大きく欠けており、そのために多くの人を納得させるには不十分であるということに気が付いた。つまり統計数字や学説などにおける学術的な補強が、自説に必要だということがわかったのである。そこで私は内外の学者・専門研究者などの意見をよく聞き、そこから学び、自説を裏打ちしようと考えた。

## 2. 若者と共に学び、若者に伝える

しかし著名な先生の話を一人で聞くのはもったいないと考え、それを勉強会形式で行おうと思った。勉強会形式であれば、他の多くの人の意見も聞くことができ、ともすれば独善的になりやすい自分の思考を戒めることもでき、一石二鳥であるとも考えた。ことに若者といっしょに勉強すれば、この勉強会に「次代の日本を背負う青年を育てる」という大義名分もつく。私はそのように考え、当初、この勉強会への参加を40歳以下の若者を対象にして呼びかけた。ところが意外に、年配の諸先輩からも参加の意向が寄せられたので、お知恵を拝借する意味から、勉強会の顧問役として参加していただくことにした。

いざ開催という時になって私には、欲が出てきた。この勉強会で、若者たちに「自分の思考スタイル」や「世界観・人生観」を伝えておきたいと思うようになったのである。私の考えや体験は、若者とはかなり違う。それは20代に「共産主義思想や唯物弁証法」に触れ、毛沢東の「矛盾論・実践論」が私の思考スタイルに、かつ劉少奇の「共産党員の修養を論ず」が私の人生観に大きな影響を与えたからである。また30代に、帝国陸軍通信参謀：皆川節夫大尉に師事し、その弟子として特訓を受け続けたことが私の行動の背骨となっているからである。しかも私は若き日の思想を棄て、転向して搾取者としての資本家の道に進み、異国の民を収奪してまで、金儲けに邁進し、現在に至ったからである。つまり結果として私は左も右も知見し、労働者階級にも資本家階級にも身を置き、仏教・キリスト教・イスラム教などの異文化社会で、さらに元共産主義国・軍事独裁国などで工場経営を行い、その真髓を体得して来たのである。この奇妙な思想と体験を若者に伝えておきたくなったのである。

## 3. 「老人突破力」

7/08の「週刊ポスト」誌に、「遠慮なし、しがらみなし、恐いものなし—頼みはこの人の“老人突破力”」という見出しで、「1年限定・亀井救国内閣でどうだ」という文章が載った。亀井静香氏が首相に最適かどうかはともかくとして、「老人突破力」を利用するという考え方には大賛成である。そこに書かれているように、現代の老人には、「遠慮なし、しがらみなし、恐いものなし」という特性が備わっているからである。これは私が主張する「老人決死隊」や、山田恭暉氏の「原発シニア隊」にも相通じる考え方であると思う。私は「なにをなすべしか」という小論の中で、老人としての私のなすべき仕事を記しておいた。この勉強会はその一環である。

現在、日本人に必要なことは、「国家や政府がなにもしてくれないことを嘆く」のではなく、「いかにして自分が国家や政府に貢献するか」を真剣に考え行動を起こすことであると、私は考えている。ことに「現世にしがらみがない老人たちが、社会に積極的に貢献して死んで行く」という新思想を確立すべき絶好の機会だと、私は思っている。この勉強会を通じて、私はその一端に迫るつもりである。

## 4. 「老人のわがまま」

老人はわがままである。これまた老人の特性である。したがってこの勉強会も、私の意欲が減退したり、体力がなくなったり、資金が尽きたりした場合は、申し訳ないが勝手にやめさせていただくので、お許し願いたい。